
墨空

yorozu

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

墨空

【Nコード】

N0071BA

【作者名】

y o r o z u

【あらすじ】

神々が気まぐれに滅ぼした大地で、希望もなく人々は生き続ける。人の心の失われた墨色の空の下、少年は天使に出会い、時と運命に抗う旅に出る。

仮想の目次（前書き）

全体構想の目次です。

小説本編ではありません。

この通りに進められたらいいなあと思いますが、
どう考えても自分の首を絞めているようにしか・・・。

全く変わってしまうかもしれませんが、その時はその時です。

仮想の目次

【目次】

第一部 未孵化の反乱分子

- ・ 墨空の異端者〈逢瀬〉
- ・ 期待値
- ・ 闇包む帯（1）
- ・ 神々

第二部 教会

- ・ 墨空の異端者〈盲目〉
- ・ 従順の拒絶
- ・ 対極の同盟者
- ・ 邪気と無邪気
- ・ 優しい調べ
- ・ 二人の邂逅
- ・ 数学の報復

第三部 異常の瓦解

- ・ 墨空の異端者〈逃亡〉
- ・ 私は道化じゃない
- ・ 双子の見解
- ・ 縁の交錯
- ・ 迷宮の子犬

- ・学者の遺産

第四部 趨勢の逸脱

- ・墨空の異端者〈人待つ名〉
- ・空に見たもの
- ・神話の探索
- ・未来へ至る道
- ・黎明の議決
- ・虚構であるべき事実

第五部 旅立ちの道標

- ・墨空の異端者〈掟〉
- ・墨の災厄
- ・私が私であるがゆえに
- ・別離の前兆
- ・別離の峻拒
- ・魔との遭遇
- ・冒険者の賭博
- ・準備、完了

第六部 咆哮の慟哭

- ・墨空の異端者〈事実〉
- ・魔と天使が見る先
- ・窮地の寓話

- ・ 潜入の酷薄
- ・ 信頼の謀反
- ・ まだ死なれちゃ困るの

第七部 決戦の邂逅

- ・ 墨空の異端者〈隘路〉
- ・ 檻の飼犬
- ・ でもそれは間違っていて
- ・ 執行
- ・ 真実の捏造
- ・ 腐敗の認識
- ・ 教会〈数学者の到着〉

第八部 孵化の反乱分子

- ・ 墨空の異端者〈結集〉
- ・ 例え誤っていようとも
- ・ 真実の究明
- ・ 神意の代行者
- ・ 教会〈魔と天使の到着〉
- ・ 教会〈信じる者の到着〉
- ・ 教会〈彼女の到着〉

第九部 破壊の牙痕

- ・ 墨空の異端者〈混沌〉

- ・教会へ各々の戦いへ
- ・扉の解放
- ・統治者の復活
- ・悲哀の史実
- ・操主と創主
- ・痕百の創主
- ・自分対自身
- ・彼女の革命
- ・彼女の秘策
- ・神意の失墜
- ・どうすればいいのか分からなかった

第十部 重なる神話

- ・墨空の異端者へ存在へ
- ・記憶の一端
- ・天使と信じる者と司書と
- ・数学と現在と
- ・魔の導き
- ・天蓋の裏
- ・生誕の兆し

第十一部 秩序の再生

- ・墨空の異端者へ意志へ
- ・拡散
- ・神々の妨害へソラへ
- ・真偽の導き

- ・ 神々の妨害〈数学者〉
- ・ 司書の涙
- ・ 神々の妨害〈信じる者〉
- ・ 誠なる真の道化
- ・ 現在の原罪
- ・ 継承者の傍観
- ・ 全ての疑問を隠蔽する場所

第十二部 真実の意義

- ・ 墨空の異端者〈侵入〉
- ・ 決意の悲嘆
- ・ ——再会
- ・ 数学の補完
- ・ やっぱりわたしはあなたが好きです
- ・ 魔と零
- ・ 明かされる真実
- ・ 天地
- ・ 十年前の鍵

第十三部 未来の決着

- ・ 墨空の異端者〈大好き〉
- ・ 神意の継承
- ・ 道化と先導の真意
- ・ 闇包む帯（2）
- ・ 立ちほだかる未来
- ・ 私は数学者じゃない、冒険者だ

- ・ 負けないよ
- ・ 女神の解放

第十四部 未完成の覚醒

- ・ 墨空の異端者〈覚醒〉
- ・ 無力に泣いて愚かに叫んだ
- ・ 慟哭と喝采
- ・ 人間になった神と女神になった天使
- ・ 定義別離統合

第十五部 二人の結末

- ・ 墨空の異端者〈回想〉
- ・ 一瞬と永遠の等価交換
- ・ 永遠と永遠の等価交換
- ・ 神と人間と一人の少女へ
- ・ 彼女の名前

幕開けの挨拶

起伏のない、無感動な合図とともに。僕らのお膳立てする劇の幕が開く。

それは喜劇？それとも悲劇？
もちろん、その両方。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

大人も子供も寄っといで。
生と死の入り乱れる、混沌と激情の劇場へようこそ。
お代はもちろんいりません、そんな陳腐な物は、もう意味を為しませんから。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

嘘と誠の二重奏。華麗なる懺悔の逆上。
血塗られた魅惑をその身に感じることはもちろんのこと。至福の結末をどうぞ。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

哀歓を共にし、愛吟しましょうその口で。
深夜と黎明、その狭間。月と太陽、その境界。希望と絶望、その混

濁。

僕らの喜劇、彼らの悲劇。

さあ楽しもう。

――そして始まる。悲哀なる運命の物語。

幕開けの挨拶（後書き）

本編と言う本編のないままに、色々な視点からゆつくりと物語は展開していき、やがて急転を迎える。

そんな小説にしていきたいと思っています。

こちらの他に「ペネトレチカ」というタイトルでも連載を始めました。

そちらの方が更新ペースは早そうです。

世界の系譜

暗澹たる闇色の空。夜ではなく。曇天とも違う。

闇に浮かぶのは赤い星々。どれもが炎のように紅く、血のように赤く。

星に見えるそれらは、しかし星でなく。

元来白光を放つ真実の星と比較して、暗色に浮かぶ偽物の星は、あまりにも禍々しく、あまりにも美しすぎた。

墨色の空とは異なる、偽装の星空——此処が、あの場所でない証左。

眼前には二人の少女。そのどちらもが星々に劣らず見目麗しい。

透き通るような蒼い瞳に、涙を溜めた少女。

血溜りのような空間から再び生誕した少女。

前者は両手足を拘束され、後者は前者の首を締め上げている。

ふと。二人の少女がこちらへと視線を転じる。

一方は救助を訴え、一方は返答を急かしている。

蒼い瞳——それは裏切りの色、信頼の謀反。

最も近く、最も遠い二人。

最も酷似し、最も異なる二人。

選択を迫られていた。

二者択一。どちらも救う——そんな夢を抱くことは許されない。

何度も口を開きかけ、しかし言葉は虚空に霧散した。

少女の首を締める指先に、より一層の力がこもるのが見える。

時間は残されていない。

時間——否。時の概念の消失した虚無の中に、残存、残滓と言った概念もまた、無い。

何処よりも曖昧で、何処よりも揺らぎ、何処よりも遠い場所で。

長きに渡る永遠に、終止符を打たんと。

あるいは封印を解く呪文のように

あるいは魔を浄化する詠唱のように

あるいはパンドラの箱を開けるように

答えを紡いだ。

「……お前の、名は————女神別離・戦の歌姫・アローデ」

答えを紡いだ。彼女の真名を。

言葉とは儚く、脆い。

約束は、違えられる。

誓いは、破棄することができる。

言葉、約束、誓い。守ることのできなかった、たった一つの——

——そして世界は滅びた。

世界の系譜（後書き）

1話に続き詩のような文章を掲載してしまいましたが、次回より小説らしい小説になります。

気長に付き合っていたただければ幸いです。

カランカラン……。

割れて一部を損失した風鈴が寂しげな音を奏でる。喫茶に風鈴はどうかと思う。幾度となくマスターに言ってきたが、一向に、自分を迎へ入れるこの音に変化は訪れない。この時代に物資の調達が如何に困難なのかなど周知の事実だが、やはり場違いな印象を拭いきれない。

店内は相変わらずホコリ臭い。破損の目立つ五つのテーブルには、料理の他にホコリが降り積もっていた。清潔感の欠片もない。それでも抗議の声が上がることはない。

ここを訪れる者には、衣食住を満足にこなせる者だっていないのだから。

不潔と隣り合わせの生活を送っている彼らが、果たして抗議の声をあげるだろうか。笑い話にもならない。

寂れたカウンターの奥に目を向けると、マスターと目があった。この時世に社交辞令もないだろうが、沈黙よりはマシだろう。腕を適当に上げて、言う。

「こんちわ」

「一人か？」

返ってきたのは、挨拶ではなく問いだった。

何と意味のない問いだろう。思わず口を苦笑の形に歪める。一人なのはこちらを見れば一目瞭然だろうに。答えるのも億劫だ。返答そ

っちのけでカウンターの一席に座した。

「あの娘はどうした？」

「水」

どうしてこう彼は人の傷を抉り出そうとするのだろうか。一番触れて欲しくない、最も痛む傷に情け容赦のない打撃を与える。もっとも、彼の言葉が鎮痛剤になる事など、初めから一辺の期待もしていなかったが。

マスターの態度に心持ち気を悪くして、カウンターを挟んで目の前にいるそいつを睨みつける。もっとも、屈強な肉体を誇る彼にそんな脅しが効くとは思えなかったが。

案の定、マスターは片手に水の入ったグラスを持ちながらも、それをこちらへ渡そうとしない。自分の方が格上なんだ、お前は俺に話すべきなんだ、マスターの態度はその心中を滑稽なほど如実に語っていた。生命を生み出し、育む源である水。それを与えることのできる自分は、ねだるお前などよりも遥かに高明なのだ、そう言いたげな視線にうんざりした。

胸中では今すぐにでもこの店をぶち壊してやりたかったが、ここにはこの掟がある。最近組みあがった鉄の掟だ。それだけは破るわけにはいかない。約束を交わしたのだから。やるかたない思いで、無愛想に答える。

「——いなくなった」

「どこへ？」

間を置かない即答。どこへ行ったのか。その答えを口に出すと、涙腺がはちきれそうになる。一度決壊すれば、きつと、涙は止まらなくなる。

人前でそんな醜態をさらすわけにはいかない。特に、目の前の奢り高ぶった勘違い野郎の前では。自制を掛けて何とか踏みとどまる。なるべく淡白に映るよう無愛想に答えた。

「天国」

「殺したのか」

「違う！」

あまりにも的外れで、あまりにも的を射たその言葉。うんざりだった。淡々としたマスターの口調。解かっている。この世界で同情や直情は過負荷となり足枷となり、己の歩みに支障をきたすということなど。信じられるのは自分だけだということなど。

その観念が当たり前だったし、今でもそれは間違っていないと思っている。ただ変わったのは、その観念に疑問を持ち始めたということ。そしてその疑問が晴れる時は、多分、俺には未来永劫訪れない。

何より不自然ではないか。皮肉にも慣れてしまった今の環境に疑問を持つことなど。

だが、それでも彼女は、過負荷を過負荷とせず、足枷を足枷としなかった。甘んじてそれを背負い、己が信念を貫いていた。

彼女の結末を知り、正直者がバカを見たと言われる者もいるだろう。その程度かと思いきや忘れてしまう者もいるだろう。相手にすらしない者もいるだろう。

万人が彼女に罵声を浴びせようと、しかし俺は、俺だけは――。一時のことなれど、その激情が腹を満たし、渴きを忘れさせた。吐息一つ。今、水を嚥下したところで美味しいと感じることはないだろう。

諦念も露に席を立ち、訪れた時と同様に扉をくぐる。

カランカラン……。

寂しげな音を良く響かせるその音は、しかしどこか乾いた音に聞こえた。

空を仰ぎ見る。

昼夜を問わず姿を変えることのない空。

今日もまた、

荒んだ墨色が、空を覆っていた。

彼女に初めて会ったのは一ヶ月前の、正午を回ったころだったと思う。

今思えば、最悪の出会いだった。

腐った街の瓦礫道を闊歩していると、突如、前方数歩分の距離で瓦礫の山からホコリが舞ったのだ。思わず歩みを止めた。不測の事態にいぶかしみ顔を歪めながらも、何が起きたのかは己の動体視力が捕らえていた。

上空から大きな【何か】が降ってきたのだ。雨である事は有り得ない。神の愚行により干からびたこの世界に天よりの恵みは決してない。

十年前。天から人間を見下ろす神々は、何らかの要因で己が地位に不満を持ち始めた。見下ろす立場の何が氣にくわないのかは、人間であるこの身では到底理解出来ない。

神々がそれぞれの役割に甘んずる事で均衡を保ってきたこの世界は、崩壊を始めた。神々が天上で仲違いをし始めたからだ。

天上で憎み合い、天上で罵り合い、天上で争っていた。だというのに、被害を被ったのは、むしろ人間や動物、植物の住まう地上だった。

神々の暴力による被害は天に収まりきらなかった。許容限界を超え溢れ出した力は災いへと変化し地上へ降りかかった。当時まだ七歳だった俺ですら、あの地獄絵図は鮮明に記憶している。三日に一度は夢に現れる、破壊の連続。前例のない異常気候が病を呼び、炎が降り注ぎ、暴風が吹き荒れ、津波が起こり、土砂は崩れ――。

およそ考え得る天災が一度に降り注いだ。

一週間も経てば、いつのまにか地上は腐り果てていた。

発展もピークを迎えた高度な文明社会は滅び、代わりに瓦礫だけを残していった。荒んだ世界を象徴するように空は暗澹たる墨色に染まり、日が差さなくなった。雨が降らなくなった。世界から、気候という概念が消失した。更に、命の根源である水を抱える海は例外なく干上がるか、汚泥に汚染された。

希望から一転、絶望が世界を支配した。初めは復興に努める団体が数多くいた。つい先日までそこにあった希望を掬い上げようと汗にまみれる者達がいた。世界全体がかつてない規模での団結力を示し、皆が必ず希望はあると盲信した。

だが。そんな運動も長くは続かなかった。

必死になって希望を探せば探すほど、皮肉にも、人々は絶望という現実を探し当てた。

大地は瓦礫と化し、植物は枯渇し、空は世界を別色に塗り替えた。人間が諦めるには十分すぎる要素の数々。海も汚れた今では水ですら満足に手に入らない。地下水を頼りに、今は何とか命を繋いでいるが、五年経てばどうなっているのかは、想像に難くない。

復興に努める声は段々とその数を減らし、ついには、なくなった。人間の敗北の瞬間だった。承った覚えもない神との喧嘩。結果、人間は大敗し、失ったものはあまりにも多すぎた。納得のいくはずもない怒りと悲しみ。

人間の怒りのやり場は当然神に向けられた。自分達の都合で世界を崩壊させた神々。神が蔑みの対象となるのに、時間は掛からなかった。

確実に滅びへと歩む世界。絶望に支配されたこの世界には、法や思いやりなどは存在しない。完全な無法地帯となったこの地で信頼できるのは自分だけだ。

空から降ってきた得体の知れない【何か】にも、やはり十分な警戒を注いでいた。

一分ほど凝視していただろうか。やがて舞い上がったホコリは晴れてきて、落ちてきた何かのシルエットが視認出来るようになる。

それは――。

「人間？」

意外な正体に、思わず思考が口について出た。それは人型をしていた。

警戒は解かないまま、ゆっくりと近づく。まだしつこく辺りに立ち込めるホコリを手で払いながら、眼下にそれを見下ろせる位置まで移動した。人型をしたそれは、女だった。それもまだ少女と呼んでいい年頃。

腰までの黒髪に、ホコリまみれで多少土色を帯びた白のワンピース。

それから――。

ふと彼は眉根を寄せた。

続いて彼の目に飛び込んできたそれは、羽だった。

背中から生える一対の羽。

その姿は、まるで天使のようだった。

神の御使いである、

天使。

蔑みの、憎しみの対象である、

天使。

それが、空から降ってきた。脳内に浮かび上がる数々の疑問も、最早何の必要性も示さない。推論を並べ立てる必要はなくなった。

諸悪の根源である神の御使いを目前にしてから、俺が理性を失うのに時間はいらなかった。心中に潜む闇色の、腐った衝動に我が身を任せた。

本能に近い殺意の衝動。

理性のはじけた快感に、しばし陶醉していた。

「――い。……………なさい……………ごめんなさい……………」

どれだけの時間が経ったのだろうか。途方もなく長い時間にも、一瞬にも感じられる。

か細く、弱々しい小枝のように儂い声に理性を取り戻した。

ふと気付けば、眼下の少女を組み敷いて、両手に首を捕らえていた。酸素を求め喘ぐ少女。悲しみの瞳からは涙を流し、許しを請う眼差しを向けていた。

その様子を見た限りでは、彼女が世界を崩壊させた患者の御使いなのだとは到底思えなかった。

——もしかしたら、自分は何か間違った事をしているのではないか。

唐突に浮かぶ一つの疑問符。それは眠っていた理性を呼び覚まし、俺を冷静にした。溢れ出る激情を抑え、大きく動悸する心臓を落ち着かせた。

観察眼を光らせてみれば、妙な点があった。今まさに自分が殺そうとしている天使の羽は、正よりも負を象徴する墨色だった。ちょうど、空を覆う忌々しい墨色に似ていた。

神話やおとぎ話での知識でしかないが、普通天使の羽は白でなかったか。人々を悪魔から守護する存在。それが本来の天使の存在意義だと聞いた事があった。

そんな存在が墨色の羽を持つ。やはり違和感がまとわりつく。不自然さから来るある種の畏怖を拭いきれない。

神の御使いたる天使とは違うのかもしれない。

そんな疑念から、憎悪の矛先となっていた両手を放した。

今思えば、それは心のうちのどこかで彼女を助けたいと思ったからなのかもしれない。何とか理屈をつけて、憤る自分を言い聞かせて、彼女を助けたかったのかもしれない。

突然空気を肺に流し込んだせいか、少女は激しく咽こんだ。口元と首を白い手で押さえながら少しずつ呼吸を整えていく。

やがて咽ぶように激しい呼吸が規則正しいものへと落ち着いていく。すると少女はこちらに恐怖と軽蔑の入り混じったような、複雑な視

線をよこした。

違和感。その視線にまたそんな感覚を抱いた。ただそれは、先程とは違った。その違和感は少女の瞳に向けたものだった。

確かに彼女の黒瞳は視線を送っている。それでも、何故だかこちらを見ていないような気がした。そんなことが有り得るのだろうか。少女と目を合わせてみても、やはり同じような違和感。目が合っていない、目が合っていない。

「……………どうして？」

まわりつく違和感が、その一言で一掃された。耳に届いた声色は、およそ彼が聞いた誰のものよりも澄んでいて、なおかつ美しかった。ハープを連想させるソプラノ。

ただ惜しく思ったのは、彼女の言葉が恐怖に震えていたことだった。苦笑。誰が彼女をそうさせたと思っている。

「……………どうして？」

返答を待つ少女は、いつまでも答えない事に耐えかえたのか、同じ問いを重ねた。

怯えきった瞳に涙を溜めてこちらをじっと見つめてくる。

それを天使と断定できたならば心情的に苦はないのだが、疑問を持ってしまった以上、そういうわけにもいかない。気まづくなって、視線を逸らした。

「お前、天使？」

結局答えを返せなかった。卑怯なのは承知していたが、問いに問いを重ねて誤魔化す。

「合ってるけど、違う」

「どっちだよ」

パラドキシカルな少女の返答。しかし曖昧とも違っていた。彼女は口籠もったりせず、ハッキリとそう言ったのだから。

ふと墨色の羽が頭を垂れるようにしなびた。覇氣の感じられないその仕草は、俺の目にどこか寂しげに映った。感情と同調するのだろうか、少女の表情も寂しげだ。

「天使だったけど、神様に怒られちゃって。堕天使にされちゃったの」

沈痛な面持ちに、無理矢理笑みを張り付かせて告げる少女は、見ていてとても痛々しかった。目の端に光る涙は、果たして首を締め上げられた時の名残か、神の叱咤によるものか。

「堕天使って、ああそうか。だから堕とされたのか」

わざとそっけない口調で言った。そうでもしなければ、少女の重たい雰囲気のにまれそうだったからだ。腐った世界での生活という重しを既に背負っているのだから、これ以上背負わされるのはごめんだった。少女への感情移入を寸断した。

まあとりあえず、これで彼女への憎悪は——あくまで、とりあえずだ——消えた。神の機嫌を損ねて堕天使になったと彼女は告げた。それはつまり、人間の敵である神との意見の不一致を差す。ならば、少女は人間の味方だ——と、思う。

「お前、これからどうするんだ？」

何の気なしに尋ねてみる。

敵でなく、人間でもない。ある意味で特別な存在である彼女に興味
が湧いた。

恐らくこの時の俺は、珍妙な物へ向ける視線を彼女に向けていたこ
とだろう。決して同情などという綺麗な感情ではなかった。

「分からない。あなただったら、どうする？突然家を追い出されて、
まったく知らない所に置いてきぼりにされたら、どうする？」

墨色の空を仰ぎながら、少女は問う。考えるまでもなかった。實際
に、自分は十年前同じような境遇に立たされたのだから。物理的に
は同じ世界でも、概念的には全く違う世界。高度な文明を持った世
界から、全てが腐った世界へと追いやられた。

そのときの惨めな体験を少女に話してやろうと思ったのは、恐らく
親切心などではない。これからお前も同じ体験をするのだと、嘲笑
していたのだ。

「まず人に頼った。それで誰も頼れないと分かると、寝るところを探
した。それから水を探した。食い物を探した。暖かい布団を探した。
——どれも見つからずに泣いた」

語るうちに、そのときの寂しさや空しさが込み上げてきて、涙が出
そうになった。

空を仰いで、込み上げてくる涙を何とか流さないようにしていると、
ふとしゃくりあげるような泣き声が聞こえた。それに対しての驚愕
が好をそうしたらしい、溢れ出そうになる涙は止まった。視線を再
び眼下に向けると、少女が両手で顔を覆っていた。

「……………ごめん……………私達の……………せいだよね……………」

少女の嗚咽に、耳を疑った。彼女は哀れんでいる。こんな境遇で生

きなければならぬ自分を――人間を。

もう何年も思いやりや哀れみといった感情には触れていなかった。そんなものはもうこの世に残っていないのだと、誰もが諦めていた。

だというのに、ないと諦めていた温かな感情が、今、目の前にある。

神への反逆によって天から墮とされたとはいえ、忌むべき存在であるはずの天使。

その時の俺は、ただただ戸惑うばかりだった。でも今なら分かる。少女こそ、この世界が求めてやまなかった本当の天使であり、希望なのだ。

「別にお前のせいじゃない。お前は世界を腐らせた神に逆らったからここにいるんだ。だったらむしろ心情的には人間と同じだ」

やはりそっけない口調でしか返せない自分に、幾ばくか苛立ちを覚えた。長年使っていなかった感情は、そう簡単に表へ出す事が出来ないらしい。

今思えば、その時の自分はどうかしていた。敵の敵は味方であるなどと甘い方程式を、その時の俺は疑いもしなかったのだから。彼女が人間の敵になるのではないか、などとは微塵も考えなかった。

無愛想な言葉に、しかし少女は律儀にも礼を返した。下ろしたままだった腰を上げて砂を払い、赤みを帯びた瞳を真っ直ぐに向けてきた。

「ありがとう……。そう言ってもらえると、少しは楽」

「まあ、色々あるだろうが、生きてろよ」

口ではそう言うものの、少女がこの世界で暮らしていくことが不可

能なのは、火を見るよりも明らかだった。騙し欺かなければ生きていけない世界なのだ。思いやりや直情は足枷にしかない。この少女は、この世界の環境に適していない。

そんなものを引きずって歩いていれば、いつか確実に足が動かなくなる。

このままでは、少女は近いうちに餓死するか、人身売買にかけられ性欲処理の道具となってしまうだろう。

「うん、頑張るね。あなたに教わった生き方を試してみるよ」

少女は、己を待つであろう未来に臆した様子もなく明るく言って見せた。

教えた生き方が全く無益だと言うことは、俺自身が証明しているとこののに、少女は、そんな不確かな方法で生きようとしている。

笑うことすら出来なかった。

少女のあまりの真っ直ぐさに目を背けたくなった。

少女は無邪気に言う。

「だから、あなたに頼る」

「へ?」

「頼りたいな」

少女の言葉に啞然とし、しばし言葉を失った。何を言っているのだろうか、理解に苦しんだ。

彼女の意図を理解したところには、少女はすっかり萎縮してしまっていた。それだけ理解するのに時間を要したということだ。その沈黙を不許可と取ったのだろう。

考えてみれば、少女は自分の教えた方法で生きていくと、そう言っ

たのだ。

——まず人に頼った。自分の言動を思い起こしてみれば、確かにそう言っていた。

つまり、彼女の言葉は半ば当然とも言える。ここには二人しかないのだから、彼女にとって頼れる人間など自分しかないではないか。

改めて少女を見れば、小動物のように小さくなって不安そうな眼差しを向けていた。

つい数分前に自分を殺そうとしていた人間に、彼女は助けを求めている。少女は臆していないのではない、不安を押し殺しているのだと、そのとき初めて理解した。

殺してくるとも知れない男についていこうとする少女。

何を企てているのだろうと一瞬考えあぐねる。が、彼女の企みを暴く事は出来なかった。元々そんなものはなかったのだ。暴けるはずもない。

「あー……」

「だ、だめかな、やっぱり？」

しばし迷って、吐息一つ。

「とりあえず、一日だけだ」

今でもはっきり思い出せる。あの時の少女の何と嬉しそうだったのか。

墨空の異端者

《逢瀬》

／Section, ????

(1)

(後書き)

よろしければ、評価いただけましたら幸いです。

期待値 / Section, フライト・クリケル (1) (前書き)

二つ目の視点から描かれる物語。

終末を迎えてさえ、

人の欲望は凝り固まり、渦を巻く場所を得る。

期待値 / Section, フライト・クリケル(1)

おおっと言うどよめきが私の周りで起こった。

私の中では、何を馬鹿なことを、とそれらを罵る主観的な自分と、それも当然だろう、と客観的な自分が混在している。

私にとって、それは賭けて当然の場だった。だからそれに従ったままで。

ただ、それがギャラリーには一発勝負と映ったらしい。視線を周囲に向けたわけではないが、皆一様に驚愕しているのだと知れた。

馬鹿どもの反応を予測するなど、私にとってはパンをかじるより簡単な事だ。

「おいおいフライト、確かにその思い切りは男らしいが、本当にそれでいいのかい？」

私の向かい側に座す軽薄そうな小太りの男が嘲笑した。着込んだ黒のスーツからはタバコのおいが嫌というほど漂っていた。まったく似合っていない。

それに、私に口答えだど？分かっていないなこのブタは。

心中で嘲りを返すが、表に出すことは許されない。ジェントルマンとして。

「ええ、これで結構ですよ。まあ見ていてください」

余裕の笑みをつくり肩をすくめる。まあ一般論でいえば、ブタの懸念も無理はないのだろう。見れば、ともにテーブルを囲むもう二人の男も怪訝な面差しを向けている。

不思議で仕方がないようだ。赤の十四に五万ドル。

ヤケを起こしたと取られても不思議のない賭け。まあ見ていろブタ

君たち。

凡才と天才の違いをとくごとく覧あれ。

程なくしてガラララツと小気味いい音をたててルーレットが回りだした。

その中を、ケージの中のねずみのように走る小さなボール。やがて勢いを弱めルーレットの数字が視認出来るようになる。そのころにはもうボールは居場所を決めていた。

その位置は――。

おおおっと歓声が巻き起こる。ブタ君たちは苦虫を噛み潰したような渋面。

言うまでもなく、ボールは赤の？のポケットに入っていた。大金が更に巨額へ。

山のようなコインを袂に引き寄せる私の顔は、勝ち誇るように口元をゆがめている。

「どうです、私の勝ちでしょう？」

見れば分かる事をあえて言ってやる。ブタ君たちは乗り気のような顔で顔を憤怒と苛立ちの色――赤に染め上げた。

「もう一勝負だ！フライト！」

威勢が良いのは大変結構なことだが、今日はもう彼らの相手をするつもりはなかった。

「申し訳ありません、今日のところは、これで」

適当にブタをあしらい席を立ち、その場を辞そうとする。

と、それを遮るように女が立っていた。赤いドレスに身を包み、妖艶な眼差しを向ける美女。おおかた、いつも誰かに訊かれる、いつもの疑問を発するのだろう。

「ねえ、何でやめちゃうの？ 今日についてるじゃない。もっと冒険してみたら？」

予測していた問いを発して、美女がなれなれしく腕を絡めてきた。図々しいことこの上ないが、紳士としてこれを無下に引き剥がすわけにもいかない。私は仕方なく腕をそのままに、皆に聞こえるように言ってみせた。

「私は冒険家ではなく、数学者ですから」

観衆には捨て台詞か常套句にしか聞こえないのだろうが、私の言っていることは本当だ。

私は常日頃から頭脳を駆使してギャンブルの期待値を計算している。その計算の結果、期待値が一に限りなく近かった場合、私はそれに賭ける。

私にとって、計算とは生活そのものを示していた。私の身の回りに起こる事象全てを計算し、全てが滞りなく進むよう配慮するのが日常だった。

計算無しでは生きられない男だ、と自分で思う。

私が計算なしで今の生活が出来る確率は……〇，二パーセントだ。

十年前、神々の抗争によって世界は崩壊した。というのが一般の見解であるが、やはり一般例に過ぎない。例外と言うのはなんにでも付加される絶対の要素であり、世界崩壊という壮大な事象についてもそれは存在した。

言うまでもない。私の今の生活そのものが、この世界の例外に値する。

廃屋より質素な家で、檻樓をまとって満足な水も得られずに飢えながら生き長らえる、というのが今の世界での常識。

しかし私の生活はと言えば、パリっとしたスーツに身を包み、毎日ギャンブルに明け暮れながら上等な部屋で上等なメシを食べ、ふかふかのベッドで安眠を貪る。

天と地、いや、銀河系とホコリの差ともいえた。

金持ちどもが何にもっとも執着するか知っているかい？

金、安住の地、娯楽……色々あるが、それらを差し置いても執着するものがある。

それは優越感だ。

貧乏人どもを階下に見下しながら自分は金を吐いて捨てる。それが奴らのもっとも執着するところであり、もっとも悪趣味な思考なのだ。

しかしそれは時として生への執着心を膨れ上がらせる。

十年前、神々の天災が降りかかる二週間ほど前だ、金持ちどもは皆ここに集まってきた。それぞれが金をつぎ込んで安住の地を作り出そうと計画したらしいのだ。

莫大な資金を投資する欲の塊どもの中に私も混じっていたのは言うまでもないが。

とにかく、前代未聞の資金をつぎ込んだ安住の地はほんの二週間で完成した。

ラスベガスが寂れた遊園地に見えるくらいにそこは豪華な街だった。

防護設備も完璧で、しかし不可思議な点も見受けられた。

例えば、天井を覆うように被せられた、この地をドームと呼ぶ所以ともなった、厚さがどれだけでも分からない鉄板。

ワケが分からない。だってそうだろう？ なんの役に立つんだ、私は疑問でならなかった。

しかしその用途はすぐに知れた。

それは、実に娯楽の街の建設からたったの三日後のことだった。突如として天から神々のとばかりを受け、世界が崩壊したのは。そうか、鉄板の役割はそれらの天災の影響を受けないようにと被せられたのか。と、金持ちの馬鹿どもの大半はそれで納得したさ。まったく馬鹿な奴らだ。こうは思わなかったのか？

あらかじめ天災が降りかかることを知っていたかのようなタイミングで鉄板が被せられたのは、ただの偶然にしちゃ出来すぎじゃないか、とね。

それについての真相は、私がドームに居を構えてから十年経ったが、未だ定かではない。

私は、十年前の災厄以来、その謎の究明に努め続けてきた。

賭博場を後にした私は赤い絨毯の敷かれた廊下を進みエレベーターに乗り込んだ。

ボタンは一回から二十七階を示す二十七個。しかし私はそれらをどれも押さなかった。代わりにポケットに入れてある、先端に特殊な溝の彫られたドライバーを取り出す。先に彫られた形状はエレベーターのボタンパネルをはめたネジと合同だ。

もうお分かりだろう。私はネジを回しパネルを外す。その裏側から現れた新たなパネルは地下一階から地下四階までのボタンがある。一部関係者にしか知られていない、そう、いわば隠しダンジョン。

地下三階のボタンを押したあと、すばやくパネルを元のようにはめ直した。

このつくりは一回は駐車場、二階から十回までが風俗店。

十一階から二十七階までが賭博場、そして地下一階から地下四階までが、生物研究機関。

プシューと小気味いい音を鳴らしながら自動ドアが開くと、私は部屋の中へ一歩踏み出した。

薄暗く狭い、陰湿な空気の漂う部屋。緑色の照明がその雰囲気を作り一層際立たせ、正常な精神の持ち主であれば溢れ出る嫌悪を隠そうともしないだろう。

そこには白衣の研究員が数名、それぞれに与えられたコンピュータに頭を悩ませていた。カタカタと無気質な音を響かせ、私の介入には何の反応もない。と言うよりも研究に没頭しすぎて気付いていないのだろう。

彼らの向こう側には一枚の大きなガラスが張ってある。十年前以前に家庭で広く使われていたような弱いものでなく、ライフル弾も止める強化ガラスだ。かと言って安心できる代物かと問われれば首を横に振らざるを得ない。地上の産物である以上、絶対の安心など得られるはずがなかった。何せそのガラスの向こうにあるのは天の産物なのだ。

ガラス越しに見えるは一人の少女。手枷と足枷をそれぞれの手足に施され、ぐったりと頭をもたげる弱々しい少女。その背中に生える

は一对の白い翼。そう、こいつは忌々しい神の御使い、天使だ。忌避すべき存在である天使は、しかし優秀な数学者である私にとっては、天よりの贈答品に等しい。

無表情を保とうとした私だったが、堪えきれず口元を歪めた。

「無様な姿ですね、天使」

冷笑に、しかし天使は無言。それどころか身じろぎ一つせず、ただうつむいていた。

面白くない。だが、ここで情に任せて憤慨するほど私は子供ではない。

そもそもこいつの態度は今に始まった事ではない。今ここで怒鳴ったところで、私に有利にはたらく確率は三二九分の八しかない。

私は視線を研究員に向け直した。声を発したというのに、彼らはまだ気付いていないようで、コンピュータと睨み合っている。天使もそうだが、こいつらも十分すぎるほどに異常だった。一日三回運ばれる食事にはほとんど手をつけず、ひたすらに研究に没頭してかれこれ十日。その間、こいつらは一度だって席を立っていない。排泄物だって出していない。こいつらの胃袋はそれほど空っぽで、枯渇しているというのか。ブタ飯みたいな質素な食事でも夢中で貪り食う天使のほうはまだ正常だとすら思える。

しばらく見ていたが、指以外まったく動かない。肩も凝るだろうに、伸びすらしないのだ。私は仕方なく自分から声を掛けた。

「どうだ、調子は？」

カタカタ……カタカタ。研究員二人は一瞬その指を止めたものの、幻聴だとも判断したのか、すぐに作業を再開した。まったく、周りに目を向けることくらいすれば良いだろう。もはや彼らの行為は

没頭でなく執着だ。相手にされないのでは元も子もない、ジェントルマン精神に反するが、私は声を張りあげた。

「おいつ、研究は進んでいるのか！」

ガタッ。

打てば鳴る勢いで回転式のイスが回ってこちらへ向いた。

研究員二人の顔が露になる。と、私は彼らの顔を見て思わず口を手で覆った。あまりにも凄惨な顔。目の下にはくまができ、頬は痩せこけ、髭は伸び放題、肌は死者のそののように血色を失っていた。こいつら、どうして生きていられるんだ……っ！

恐怖に視線を逸らそうと試みるも、どうしても出来なかった。生気の欠片も無いその面に、しかし目だけには生氣、そこどころか野心をみなぎらせていたのだ。研究の邪魔をするなどばかりに、彼らは私を鬼のような形相で睨みつけている。ただそれも、声の主が私だと理解すると多少和らいだ。

「ああ……なんだ……フライトさんか……。研究は……進んでますよ……。薬物投与……したら……すぐに……べらべら喋りだしました……」

およそ生氣というものを感じさせない口調。まるで死者と話しているようで、私は吐き気を覚えた。しかしそのぎらついた眼は、生者そのもの。こいつらは生きながらにして死んでいる。恐らく、実験体を取り上げようものなら、彼らは発狂するだろう。実験体は今の彼らにとって生きていく糧にも等しいだろうから。

息の詰まりそうな口調で研究員が続ける。

「いろいろ……分かりましたよ……。でも……肝心なところは……聞き出せません……。どうやら……記憶を……いじられてるみたい

なんです……」

研究員の一人はそう言って一枚の書類を寄越した。研究結果を示す物だろうそれを渡すと、すぐにまたコンピュータと睨めっこを再開した。私は思わずため息を漏らす。研究を始めた当時はこんな奴らではなかったのだが。やはり人間の上を行く存在を蹂躪するのは楽しいのだろう。ここには見下すのが好きな連中しかない。

研究員はキーボードを操作して、ガラスの向こうに電撃を放ったようだ。天使の髪と羽が逆立ち、ずたぼろになる。走り抜ける電流に涙し、身を痙攣させた。見るに耐えない光景、と普通は思うのだろうが、この場、この楽園に、そんなセオリーに従順な輩などただ一人としていない。

私は視線を書類に移した。事細かに詳細が書かれている。

一〇二〇時／実験体にクロンマルム投与

一〇二六時／薬物効果判定・有

一〇二七時／尋問 ※詳細は以下のとおりである

※名及び生年月日は不明。

拘束具の効果により天使としての力は発揮不可と判明。

天界からの御使い、途中原因不明の事故によりドーム付近に落下。

目的はケイ・アロトの解放であると主張。

実験体の言葉から察してケイ・アロトは神である可能性が濃紺。

ケイ・アロトの所在については不明。

ケイ・アロトの詳細は最下段に記載。

単独であり、仲間は無いと主張。

十年前の災厄については知らないと主張。恐らく神々による記憶操作と思われる。

ケイ・アロトは人間に数々の恩恵を与えた神である。
のちにバゼなる神に、地上に縛り付けられた。

永遠の命を有しており、永遠に捕縛されつづけ今もなお苦しんでいる。

上記が文献によるケイ・アロトについての伝説であるが、真偽の程は定かではない。

まず私が着目したのはクロンマルムという薬物だった。クロンマルムとは世界の崩壊以後、不純な大気に生成された新種の薬物だ。効果は幻覚を引き起こし、思考能力を低下させるというもの。そのため、今回のように尋問の際よく用いられる麻薬なのだ。

しかしこの麻薬はさほど大きな効果はもたらさない。精神の安定している者ならば、何とか対抗出来るものに過ぎないのだ。もっと強い効果をもたらす薬物は、私でさえ知っている。専門家である彼らが知らないはずが無いのだ。無いのだが……。

ああそうか、思考を巡らせ答えに行き着く。この薬物の優れているところは、副作用がほとんど無いという点にある。と言っても、あくまで麻薬の中での話だが。

つまり彼らの尋問は、これが最初に過ぎないという事なのだろう。だから敢えて弱い薬を使った。これからもいたぶり、蹂躪し、それにより自分達の自己を保つために。おもちゃは大切に扱って、最後まで楽しむということ。

悪趣味な奴らだ。反対はしないがね。

研究の成果はどうやらこの書類一枚つきりらしく、付属されている

データなどは見当たらなかった。研究員は相変わらず研究に固執しているし、ここでの私の役割などない。

吐息一つ残して、私は用済みとなった趣味の悪い空間から抜け出した。研究室にすることで私が利益を得る確率は、たったの二パーセントだった。

賭博で一稼ぎして研究の経過を聞いて。それ以外に私のすることなど、ないと言って差し支えなかった。用をたして食事をする、私のすることといえば、それくらいなのだ。

私の生活は裕福と表現してもまだ余りあるほどの贅沢三昧だ。墨色の空の下で飢えながら日々を暮らす貧乏人とは違う。

右腕に巻いた銀時計に視線を向けると、針は午後九時半を示していた。食事も用も賭博も研究の聞き込みも済んでしまった。これ以上は何をするでもない、私は眠る事に決めた。

楽園と称されるこのドーム内はかなりの広さがあり、賭博兼風俗兼研究機関のこのビルから私の寢床までは三キロ近くあった。歩いて往来できない距離では決してないが、そこは贅沢な私のこと、もちろん車を使っている。

一階でエレベーターを降りて絨毯敷きの廊下を進み、駐車場に出た。見るものを圧倒する高級車の数々が私を迎える。並んでいる車はざっと百台近くで、そのどれもが十万ドルを越える高級車なのだ。

まったく、あんなブタどもに乗られているなんて、君達はさぞ悲しいことだろうね。

物言わぬ高級車たちに同情しながら私は自分の愛車へ足を向けた。やがて見えてきたのは真っ赤なポルシェ。夜闇の中にもかかわらず、私の目には眩しく光る愛すべき相棒。軽く愛車にウインクしてから

車のキーをポケットから取り出した。

愛車まであと三メートル二十三センチ。ふと苦笑、こんな時まで私は計算している。

と、笑みのかたち唇を歪ませた時だ。

「な——っ！」

脇腹に突如として熱いものがこみ上げてきた。火傷を懸念するほどの熱さ。熱さを感じた一瞬後には、鋭い痛み。

突然の体調の変化にいぶかしみ驚愕し、目を丸くして熱源——脇腹に目を向けた。そこには、あるはずのないものがあった。

短い柄を外気にさらし、刃を私の体内に隠した、一本のナイフ。

「馬鹿………な……っ！」

刺された？

そう理解したころには、もう私の脇腹からはナイフを中心として真っ赤な染みが瞬く間に広がっていた。それが血なのだとは分かる。だが、どうして。

おいおい何の冗談だ？

刺されたって？

ふざけるな。

叫んだつもりだったセリフは、しかし喉を震わせることなく胸中に留まった。

鋭利な刃物で刺されたと脳が認識すると、お節介な事に激しい痛みを感じ始める。鋭い激痛に顔を歪め、両手で傷口を押さえ圧迫する。

ナイフは抜くなどという愚行は犯さない。ナイフに開けられた内臓の穴にふたをしておいたほうが、まだ安全だからだ。安全？気休めにもならない。

ズキン！　ズキン！

断続的な激痛に、身体を折って片膝立ちになり、額からは脂汗が噴きだした。

元凶は……近くにいるッ！

苦渋の面を必死の思いで上向かせ、視線を巡らせ——るまでもなく、そいつは眼前にいた。奇妙な奴だった。腕、足、胴、顔、体中いたるところに薄汚れた包帯を巻いた、そう、さしずめそいつはミイラ男だ。こんな間抜けな格好をした奴に私は刺されたのか。悔しさが相乗して、私の苦渋の表情は一層険しさを増したことだろう。

「貴様……………っ！」

「……………」

文字通り絞り出すような声で私は必死に言葉を投げたが、眼前のミイラ男は返答どころか身じろぎ一つしなかった。

「誰に……………頼まれた……………っ！」

出で立ちから彼が外の出身だと分かる。こういう輩は、己の私怨からではなく、人に依頼されて殺人を行う。今回も十中八九間違いない。ならばクライアントを聞き出して必ずそいつを殺してやろうと思ったが、やはりミイラ男は沈黙を守った。

チツと舌打ちすると、意外にも奴の動向に変化があった。一步こちらに近づいてから、その身を折って片膝立ちになり、差し伸べるように手を出す。一瞬呆気に取りられてしまった。が、その真意が分かると何ともつまらない。

ゆっくりとこちらに手を差し出したのは、しかし決して私を救うためではなく、彼は脇に刺さったナイフを問答無用でズブリと引き抜いた。

あまりの激痛に声にならない悲鳴が上がった。片膝立ちも辛くなつて、思わず地面にのたうった。身体を横たえたまま奴を睨み上げると、ふざけやがって、奴は平然としているじゃないか。

私の血のついたナイフを片手に、奴は何事もなかったように背を向け、歩き出しやがった。ああそうさ、私は奴をずっと睨んでいたっていうのに、ヤツは一度も振り返らなかったんだ。

痛みに悶えながら幾度となく後悔し、自分を侮蔑した。どうして自分が暗殺される可能性を計算しておかなかったのか、と。出血の勢いはとどまることを知らない。

このままならあと五分もたずに天へと召されるだろう。

私は忌々しい神や天使のいる世界へ行くのだろうか。

いや、有り得ないな、私はどう考えたところで地獄行きだ。

どっちにしろ、私はそれを望まない。

死にたくない。

くそっ、ふざけるな。

くそっ、何度も何度も計算しているというのに、期待値が一以上にならない！

それどころか、限りなくゼロに近いと来たもんだ！

私が明日の日の出を拝める確率は、百分率で表すなら、

0,000000000000000000000000000021パーセントしかない。

だが、それは言い換えればそれだけの確率があるということだ。決してないわけじゃない。

いいだろう。

望むところだ。

その限りなくゼロに近い可能性に賭けてやろうじゃないか。

果てしなくオッズの高い、一世一代のギャンブルだ。

数学者じゃない、冒険家になってやろうじゃないか。

0,000000000000000000000000000021パーセントに、命を賭ける。

期待値 / Section, フライト・クリケル(1) (後書き)

続きを気にしてくれる方、偶然ここに辿りついた方、
いらっしやいましたら、評価いただけましたら幸いです。

闇包む帯 / Section, 殺し屋(1) (前書き)

闇に融ける視線は、滅亡の裏を覗く。
深淵に見た、偉大なる者達の狂おしき残響。

闇包む帯 / Section, 殺し屋(1)

「見事な手際だったじゃない」

標的を殺した帰り際。唐突に声を掛けられたのは、闇の帳に落ち込んだ、狭い路地を歩いていた時だった。

警戒心も露に声の方向——背後を振り返る。

そこには何もなかった。いや、その表現はいささか不適切か。無かったのではなく見えなかった。

月の光すら差さない路地裏には一切の光源がなかったのだ。

妙だ、と心中で独りごちる。

俺は常日頃から光を嫌い、極端に暗い道を好んで歩いている。だが、そんな俺ですらこの闇の中で見えるものは、やはり闇しかない。

だというのに、この声はなんと言った？

見事な手際だっただと？

つまり声の主には俺のことが見えていると言うのだろうか。おかしい、この闇は、夜目が利くなどといった甘いもので克服できるレベルじゃないはずだ。

「だんまりっていうのは、失礼じゃない？」

沈黙をコミュニケーションを拒否されたと受け取ったらしく、苛立ったのか声にいささかとげが含まれている。

警戒は解かないまま、言葉を問いというかたちで返す。

「……………なぜ分かった？」

声の主——恐らく女だろう——は、俺の問いが冗談のように聞こえたのか、くすりと笑った。何を当然なことを、とでも言いたげな口調で返してきた。

「そんな包帯巻いて、ミイラみたいな格好してるのが他にいると思ってるの？」

やはり見えているのか。

これまでに闇に紛れて暗殺を行うこと数十回。

正確な数は覚えていないが、そうだ、一度や二度なんてものじゃなかった。

この女は何者なのか。少なくとも、常人ではない。

「……………何の用だ」

「動かないで」

ふと背筋に悪寒が走った。

暗殺者としての長年の勘という奴だろうか、そいつが告げている。

俺はここで死ぬ、と。

女がたった一言を紡いだ瞬間、俺は動こうにも動けなくなった。

手が、足が、全身が震え上がる。

女はまだ何もしていない。

手すら触れていないのだ。

だというのに、この震えはなんだ？

右手に握るナイフを、手が白くなるくらい強く握った。

「……………俺を、殺すのか？」

「そのつもりよ」

冷笑混じりの即答。

「なぜだ？」

続く俺の問いに、女は初めて言葉を詰まらせた。数秒の間、吟味するように時間をたつぷりと取ってから、そうね、と一言前置きしてから、再び軽い口を開いた。

「ドミノ倒しって知ってるかしら？」

？ 何を突然。女の意図が読み取れなかったが、生を繋ぐには答える必要があった。

「西洋カルタのことか？」

「そう。じゃあその西洋カルタを使って遊ぶドミノ倒しは？」

「……………知らん」

俺の無知を嘲笑うように、女の声が弾んだ。他者に自分の知識を押し付けるのが好きな性分らしい。こういう輩は秘密を守れない。

だが、それはむしろ好都合と言えた。話に夢中になれば気がそちらに向いて、逃げる機会ができるかもしれない。大して興味もない話を、いかにも興味深そうに聞く。

「特別に教えてあげる。ドミノ倒しっていうのはね、ドミノを等間隔に並べていって、そうね、道を作っていくの」

女が言葉を止めてこちらに気配を寄越した。今の話の感想を要求しているのだろうか。と言っても、今の説明は俺の理解の範疇を越えていた。

「……………そのどろころが遊びなんだ」

「ええ、ここまでは過程なもの」

女が満足げに頷く。

「ここからが本番。今度はね、苦勞して築き上げたドミノをちゃんと一押し」

「……………倒れてしまうではないか」

「ええそうよ、一つが倒れれば二つ目が倒れ、二つ目が倒れれば三つ目が倒れ……連続する動作で、長時間掛けて並べ上げたドミノはその何倍もの速さで倒れ、崩れていく」

「……………なぜ？」

なぜ苦心して並べたドミノを自ら崩すのだ。

「答えは簡単よ、崩す為に並べるんだもの。崩さなきゃ目的は達成されない」

「崩す事そのものが……………目的？」

まったく理解出来ない。

女の言葉そのものは言語として分かるが、その意味の先が見えない。無に帰すために有を築くなど……。

結局は何も残らないのだから、意味が無いではないか。

それに……。

「その話と、この状況と、何の繋がりがある」

女の注意を今に向ける。

それでは逃亡できる可能性が低くなってしまいうだろうが、どのみち可能性云々を議論したところで、この女には意味の無いことなのだと、今の会話のやり取りの間で知れた。

話をしている間も、彼女の気配が鋭さを鈍くすることが片時も無かったからだ。

「そう、今の話はてんで関係ないことに思えるでしょうね。でも違う。今の話はドミノ倒し。そしてあなたが今立たされている状況も――」

女がいったん言葉を切る。焦らしてやろうとでもいうのか、まったく意地の悪い女だ。こいつが俺より弱ければ、とつくに肉隗に変えてやっている。憎々しげな視線を女がいるはずの背後に送ると、それに気付いたのか女が続いて口を開いた。

「――ドミノ倒しなのよ」

「なんだと？」

思わず反射的にそう返した。

今度こそ言っている意味が分からない。

人間をドミノに見立てていると？

そんなことは有り得ない。

ここには俺とお前のたった二つのドミノしかないではないか。

それに、人間を一人倒したところで、それが連鎖するとも思えない。

「ふふ、貴方もしかして、人間でドミノ倒しするんじゃないか、とか思ってるんじゃないでしょうね？」

絶句。俺の考えは浅はかだったらしい。

表面的な意味でしか捉えていなかった俺の見解は、やはり間違っていた。

図星を差されて何も言えなくなった俺を、女は嘲笑する。

その間も、彼女に油断を垣間見ることは出来ない。

「私が言ったのは、人間の連鎖じゃない、運命の連鎖よ」

「…………運命の？」

「そう、天地創造以来、神の庇護の下で人間は衣食住を覚え、言語や、生活への装飾といった文明を生み出した。めまぐるしい成長は留まることを知らず、やがて下界からは不可視のはずの神を祭り上げるに至った」

一息。女が息を継ぐ。俺は先を促すように沈黙を守っていた。

「ここで考えてみて。人間達の取ってきた行動は、

——どこかドミノ倒しに似ていると思わない？」

「…………な…………？」

驚愕に目を丸くして、口から漏れた言葉はそれだけだった。人間、驚愕のレベルが一定を超えると、逆に言葉が出てこないものらしい。女の言いたいことは何となく理解できた。つまり、俺たち人間が築き上げてきた文明などは、実は全て神の手によるもので、それらは倒すためだけに成されたのだ、と。

人間というドミノを立てて、次に衣食住を立て、言語を立て、文明を立て…………。

「察しがいいじゃない。貴方達人間が絶対だと思っていたこの世界は、真実を辿れば所詮神の娯楽でしかない。それも、神々の目的は創造ではなく…………」

「…………カタストロフィー」

大災害。

女の言葉を継ぐ。

俺たちが、世界が、娯楽だと？

俺たちが世界と呼んでいたものは、歴史と呼んでいたものは、人間と呼んでいたものは……。神々から見れば全て破壊するための過程に過ぎなかったというのか。

彼女が十年前以前に現れていれば、それをただの世迷言だと嘲笑っただろう。

だが。

実際、神々は世界というドミノを、倒した。

崩した。

ある日突然、何の前触れも無く。

人間が、途方も無く長い年月で築き上げたものを、ほんの一週間足らずで、完膚なきまでに滅ぼした。

「だが、世界が滅んだのは、神々の抗争だと――」

「抗争？ まあしたでしょうね。もっと並べてから倒すか、今倒すか。二派に分かれてね」

「そんな……………っ！」

嗚呼、神々のどれだけ勝手なことか。

抗争の原因が、娯楽を長引かせるか、今終わりにするかだったかどうか？ ふざけるな。

神々は娯楽のために勝手に世界を創り、勝手に滅ぼしたと言うのか。ふざけるな。

そんな些細な抗争を、俺たちは大変なものと誤認していたのか。

「勝手勝手って言うけどね」

「なに？」

驚いたのは、女の言葉というよりも、彼女が心を見透かしたような発言をした事にだった。言葉には出していなかったはずだ。読心術など、明らかに人間の範疇を超えている。ならば、やはりこの女――。

「けどね、人間のするドミノ倒しはどうなのよ？ あれだって、貴方達は勝手に立てて、勝手に倒してる」

「何をバカな事を。ドミノに意志はない」

「本当に？ 貴方はそれを証明出来る？ 可能性がゼロだと言い切れる？」

「お前は、ドミノに自由意志がある？」

「無いかもしれないけど、有るかもしれない。可能性の否定は世界を狭めるわ」

何が言いたい。

「つまりね、神々にとって人間の世界なんかその程度の物なのよ。人間の自我なんて認めてないの。コンピューターのプログラムと同じレベルで見てるのよ」

何も言えなくなった。ならば今ここにいる俺は何者だ？

ただのプログラム？

ドミノの一つでしかないというのか？

「そう、貴方はドミノ。でもね、特別な、神々を討つためのドミノ

よ」

「？」

「だってそうでしょう？人間は、まだ世界にわずかでも残っている。そうよ、神々はドミノ倒しに失敗した。倒れなかったわずかなドミノは、世界の住人に託された。」

私たちのすべきことは、そのドミノを、倒すためじゃなくて、天へと手を届かせる土台とするために、積み上げていくこと。

今、世界は世界の気付かないところで脈動を始めた。神々はもったいぶりすぎた。世界は、人間は成長しすぎたのよ。神々の予想すら越えるほどに。人間は近いうちに神々への反乱分子となり、奴らを脅かす。私は、それをやりに来た」

……………。

勝手気ままをやってきた神々に一矢報いる事が出来るというのか。

世界は、人間は無力ではないと。

そうか、それが、神々を討つ運命の連鎖。

「貴方、頭いいじゃない。なら、受け入れてくれるかしら？あなたは、連鎖のためにどうしても死ななければならぬ人間なの」

「……………ああ」

彼女の真意の全貌は未だに掴めない。

なぜ俺が死ねば運命が好転するのも分らない。

だが、彼女は、世界の、人間の味方。

今さっき、彼女は神々の事を奴らと憎々しげに呼んだのだから。

彼女は救ってくれるのかもしれない。

この、神々の娯楽でしかない世界を、人間を。

そう思わせるだけの力強さと説得力が、彼女にはあった。

そう、俺は彼女に賭けてみる。

その賭けの前金が命だろうと、決して高くはないのだと、俺には思

えた。

「……………ありがとう」

心臓を一突き。躊躇はあっても、寸分変わらず俺に致命傷を与えた。
今際の際に見えたものがあった。

一瞬——幻覚だろうか——女が光に照らされて、その姿が浮か
び上がったのだ。

真っ赤なドレスを着込んだ、冗談のように美しい女だった。

その背中には、一對の翼。

そう、彼女は天使。

神々を討つために舞い降りた、俺たちの天使。

——神々への反乱が始まる。

闇包む帯 / Section, 殺し屋(1) (後書き)

続きを気にしてくれる方、偶然ここに辿りついた方、
いらっしやいましたら、評価いただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0071ba/>

墨空

2012年1月8日02時46分発行